

JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY  
THE RAICHO HIRATSUKA PRIZE 

2012 (平成24) 年12月1日  
全4枚(この用紙含む)

報道関係各位

学校法人 日本女子大学

---

第八回「平塚らいてう賞」贈賞式が開催される

顕彰1件 秋山 佐和子 氏

---

第八回「平塚らいてう賞」贈賞式を、12月1日(土)午後2時から日本女子大学新泉山館大会議室(目白キャンパス)において開催し、日本女子大学 蟻川芳子 学長より、顕彰1件 秋山 佐和子 氏(歌誌「玉ゆら」主宰、日本歌人クラブ中央幹事、現代歌人協会会員、日本文藝家協会会員)に対して、それぞれ賞状と副賞賞金を贈呈いたしました。

「平塚らいてう賞」は、「平塚らいてうの記録映画を上映する会」のご芳志をもとに、人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏(1906年日本女子大学卒業)の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に対して、顕彰と奨励をはかることを目的に創設したものです。

募集にあたっては、本趣旨を社会に広く伝えること、また、今後の活動が進展することを願い、全国で研究や活動を行なっている個人、または、団体を対象としています。

第八回目の今回は、顕彰3件、奨励2件の応募があり、厳正な審査の結果、受賞者を決定しました。

顕彰はこれまで際立った功績をあげた方へ授与し、奨励は研究や活動を継続的に行なっている方、あるいは新たに取り組もうとしている方に授与します。また本年は、女性映画監督による質の高い作品の普及に長年にわたり取り組み、女性の文化の輪を国際的に広めた功績に対して特別賞を設けました。

本賞は、平塚らいてうの精神を受け継ぎ、平和で平等な21世紀の社会を作るために行うものであり、今後もこれからの社会を担う多くの若い研究者や活動家の応募を期待しております。

問い合わせ先

日本女子大学 総務部 広報渉外課

「平塚らいてう賞」事務局

電話: 03-5981-3176

FAX: 03-5981-3164

## 『青鞆』に発表した二人の歌人

「平塚らいてう賞」が、らいてう日本女子大学卒業百年を記念して2005年に創設されてから、今年も早、第8回目の贈賞式を迎えました。日本女子大学の第3回生として家政学部に進学したらいてうが、本校への入学を希望した動機は、創立者成瀬仁蔵が本学設立運動にあたって著した『女子教育』に強い感銘を受けたため、とされています。『女子教育』には「人として、婦人として、国民として」、この三方向から女子を教育すると述べられています。男女平等の精神のもとに人格および個性を持った一人の人として、平和への貢献を天職とする人として、社会人の一人として女子を捉えた成瀬仁蔵を、らいてうは心から尊敬していました。数々のフェミニズム運動のオピニオン・リーダーであり、『青鞆』を創刊、婦人参政権運動に力を尽くし、更には平和運動のシンボルとして多大な影響を与えた行動は、自らを「成瀬仁蔵の魂の子」と思い込んでいたらいてうの足跡であろうと思われまます。

「らいてう研究」が広がりを見せているなか、本年度は『青鞆』に多くの歌を発表した二人の歌人についての研究が顕彰されました。毎年、前年度受賞者の講演を伺うたびに、改めて賞の重みを感じています。本賞の知名度がますます高まりますことを期待して、今年も贈賞式に臨みたいと思います。

2012年12月吉日

学校法人 日本女子大学 理事長・学長 蟻川 芳子  
～第八回「平塚らいてう賞」贈賞式リーフレットより～第八回「平塚らいてう賞」選考委員発表コメント

第八回受賞者の選考にあたり、私どもは、候補者の業績を広く、世界の女性のさらなる解放、問題の解決、平和問題や地域社会への公正な目配りと着実な行動の継続という観点から論議し、以下の業績に対して、「顕彰」に値するとの結論に達しました。ご業績の特色や褒賞に値する観点は下記の通りです。

<顕彰> 受賞者：秋山 佐和子氏  
研究テーマ：『青鞆』と関わった歌人 原阿佐緒と三ヶ島葎子の歌と生の再検証

<受賞理由>

平塚らいてう賞の第八回の顕彰は、秋山佐和子氏の『『青鞆』と関わった歌人原阿佐緒と三ヶ島葎子の歌と生の再検証』に差し上げることが決まった。選考委員会で一同賛同の即時一致をみた。

『青鞆』あるいは平塚らいてうに触れていることは勿論であるが、近代の女性歌人として著名ではあるが、さまざまに評価されてきた両歌人の生涯を追った2冊の大著が主な受賞の対象である。

三ヶ島葎子については『歌ひつくさばゆるされむかも 歌人三ヶ島葎子の生涯』（TBS ブリタニカ 2002年8月刊）があり、本書は第一回日本歌人クラブ評論賞を受賞している。この研究の過程でその親友の原阿佐緒に関心を寄せ、『原阿佐緒 うつし世に女と生れて』ミネルヴァ日本評伝選（ミネルヴァ書房 2012年4月刊）の近刊書となった。本書の出版は、新刊として、評論として、さまざまな短歌誌に



において、賞賛をともなう取り上げられている。

三ヶ島菫子は貧困と病弱と夫の女性関係の苦しみの中にあり、原阿佐緒は美貌ゆえのスクンダルにまみれた女性として従来取り上げられてきた。しかし、秋山佐和子氏はこのような人物像を転換させたといえる。

それを可能にしたのは、一つは長年にわたる研究の成果である。先ず先行する長短さまざまな両歌人の研究や評価を参照するばかりでなく、膨大な資料を駆使し、周辺の人々との関連を追い、詳細な群像を浮かび上がらせている。さらに、『青鞆』に一千首余を発表した三ヶ島菫子、二〇四首を発表した原阿佐緒の短歌を中心に両歌人の歌を多く引用し説得性を高めている。それは筆者自身が歌人であるがゆえに、それぞれの歌の持つ情景をときに解説を加え読者に訴える叙述となっているからである。

両歌人に偏見を持たずに寄り添い、両者が歌人として内なる声に誠実に生ききった生涯を追う。それは平塚らいてうと重なり、現代に生きる我々にも読み応えのある著作となったと言えよう。

以上

## 第八回「平塚らいてう賞」＜顕彰＞ 受賞スピーチ（要旨）

秋山 佐和子 氏

（歌誌「玉ゆら」主宰、日本歌人クラブ中央幹事、現代歌人協会会員、日本文藝家協会会員）

今からおよそ百年前、与謝野晶子に導かれて「青鞆」と関わった二人の歌人がいた。

「生きながら針に貫かれし蝶のごと悶えつつなほ飛ばむとぞする」と、離婚しシングルマザーの原阿佐緒は、男性社会の中で生きぬく、との強い意志を歌にこめた。阿佐緒の親友三ヶ島菫子は、「子のためにただ子のためにある母と知らば子もまた寂しかるらむ」と、母もまた成長していきたい、と現代の女性にも普遍的共感を呼ぶ願いを歌に託した。

「青鞆」の「新しい女」の生き方を模索し、正直に生きて歌った原阿佐緒と三ヶ島菫子。その真の姿を二十年かけて追った二冊の評伝が、このたび栄えある「平塚らいてう賞」を受けたことに心からお礼を申し上げたい。

今、私の目の前に、平塚らいてう、原阿佐緒、三ヶ島菫子が、寄り添ってほほ笑んでいる姿が見える。三人とも、まだまだ、これからですよ、と言っている。それを励みに、私の拙い歩みをもう少し続けていこうと思う。

問い合わせ先

日本女子大学 総務部 広報渉外課

「平塚らいてう賞」事務局

電話：03-5981-3176

FAX：03-5981-3164